

脱原発情報

大飯原発再稼働に嚴重抗議！

6月16日、野田首相は関西電力大飯原発3・4号機の運転再開を正式に決めた。福島原発事故は収束にはほど遠く、耐震対策や安全対策、周辺地域の避難対策など何もかも手付かずのままの再稼働に嚴重に抗議するものである。

16万超の避難民と多くの犠牲を直視せよ

原発過酷事故から1年3ヶ月、今も16万人が難民生活を送り、慣れない土地、狭い住居、家族離散、将来不安により心身共に疲へいたした人々の自殺、事故死、孤独死が後を絶たない。県土の3分の2に放射線管理区域以上の放射能が沈着している。

3基の原子炉はメルトスルーにいたり毎時6～9トンの冷却水を入れても水位は40～60センチ程度で格納容器の破損箇所から地下へ海へ大気へと汚染水が漏れ出ている。

建屋内の放射線量は毎時72.9シーベルトで致死量の10倍の線量で近づけない。建屋地下の汚染水は8万トン、敷地内には10万トン超が溜まっている。1～4号機プールには3108体もの使用済み燃料があり地震で崩壊が危惧されている。

日本列島はいつ巨大地震が襲っても不思議ではない。このような状態で再稼働は「何を血迷ったのか？」としか言うべき言葉はない。

地震大国日本の原発再稼働は亡国政策

中央の資料は原子力安全・保安院が即席で作成した「30項目安全基準」の再稼働安全対策の主要部分である。①の免震重要棟の使用開始は15

年度としている
②の防潮堤建設工事は13年度
③のベント設備フィルター設置は15年度③の水素処理装置設置は次期定期検査に繰り延べされた。

驚くべきは④の防災対策である。住民避難の手段、放射性物質

の監視体制、地域防災計画など住民の命にかかわる問題も「原子力規制委員会」設置法案の施行後「半年以内」と先延ばししたままである。

さらに、「大飯原発のそばには海から陸に続く3つの断層があり耐震設計は最大の揺れを考慮していない」の指摘も「対策不要」として運転を強行するという。「大地震津波は起きないだろう！」の幻想に基づく大飯原発再稼働は“亡国政策”そのものである。



関西電力大飯原発 左手前から4・3・2・1号機

大飯原発再稼働安全対策諸課題

課 題	実 施 時 期
① 免震重要棟建設完了	2015年度
② 防潮堤建設工事完了	2013年度
③ ベント設備フィルター設置	2015年度
③ 水素処理装置の設置	次回定期検査
④ 防災対策の策定完了	新組織関連法施行から半年以内

原発事故 避難生活 犠牲者次々と… 葛尾村から三春町へ避難 通院の帰途交通事故 5 名死亡

事故現場の手前 左カーブ先が事故現場



事故の悲惨さを伝える新聞



6月9日、午後0時頃、二本松市針道の国道349号で男女6人が乗ったワゴン車と大型トレーラーが衝突し5人が死亡、1人が重傷の大事故が起きた。

事故にあった人たちは福島第一原発の事故で葛尾村から三春町の仮設住宅で避難生活を送っていた人達だった。ワゴン車は南相馬市の眼科医院のもので原発事故の前から葛尾村の人達を送迎していた。事故が起きた国道349号は原発事故後、警戒区域の迂回路として交通量が急増していた。葛尾村の人達が住む仮設住宅では「原発事故による避難がなかったらこんな事故に遭わなかった」の声が広がっている。

自殺と孤独死相次ぐ

6月12日、原発事故に伴い避難指示解除準備区域になっている南相馬市小高区の民家で、同市鹿島区の仮設住宅に避難している男性が納屋で自殺しているのが発見された。5月28日、浪江町の62歳の男性が一時帰宅中に自殺遺体で発見されたことを伝えただけだったが、半月余りでまた起きてしまった。(既報N.142) これに孤独死が加わる。

慣れない土地を転々として、つる不安と焦燥。家族離散による孤独は心身にダメージをあたえ続ける。これに先行きの見えない長期化が加わり「先行き不安でいろいろ考えてしまう」「眠れない」と訴える人が増えている。避難者を見る目も時の経過と共に微妙に変化し、人との接触を知らず知らずのうちに避けてしまう。原発事故は悲しみを生み出し続けている。

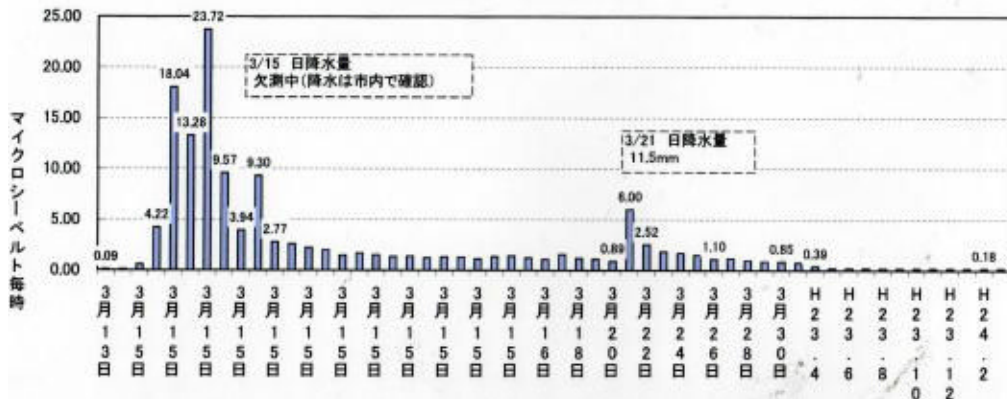
自殺と孤独死を伝える新聞



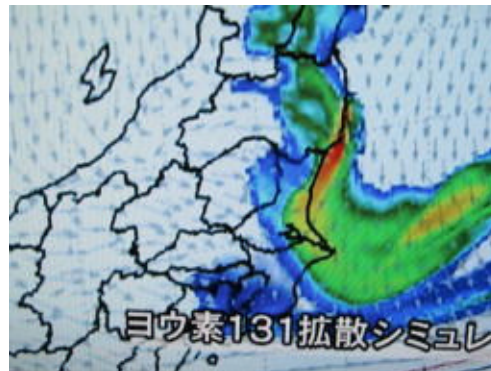
2011年3月15～16日の2日間 大量の放射能が降り注いだ！

東電は去る5月24日、福島原発事故で大気中に放出した放射性物質の量は90万テラベクレル（テラは1兆）と発表した。そのほとんどは破損した原子炉格納容器から漏れ出したものだった。特に3月15～16日の2日間だけで2・3号機から計34万テラベクレルが放出された。この初期被曝の実態を追った。

(資料1) いわき市県合同庁舎の事故発生時からの放射線量の推移 (いわき市HP)

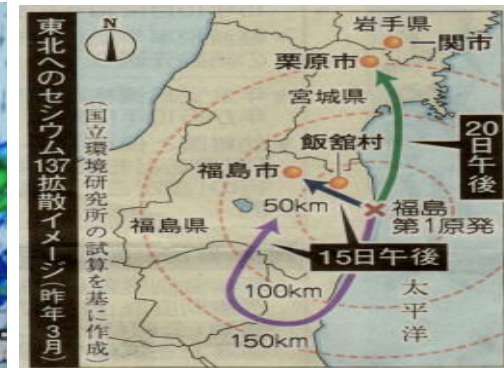


(資料2) 3月15日のヨウ素131の流れ



〔NHK・ETV特集「埋もれた初期被曝を追え」〕

(資料3) 東北へのセシウム137拡散イメージ



〔2012.6.14 河北新報〕

いわき市で毎時23.72マイクロシーベルトを記録

(資料1)は、いわき市県合同庁舎の昨年3月13日からの放射線量の推移である。その解説には以下のように記されている。

事故発生直後の放射線量の現況について

いわき市 原子力災害対策課

いわき市においては、平成23年3月15日の午前4時に最大の毎時23.72マイクロシーベルトが確認されました。

その後、放射線量は時間と共に減少していきましたが、平成23年3月21日午前11時に毎時6.00マイクロシーベルトが確認されました。これらの高い放射線量が確認された際は、雨などによる降水があったことから上空の放射性物質の一部が地表に降下したものと推測されます。

その後は、時間とともに放射線量は減少傾向を示し、概ね0.20マイクロシーベルト未満の値で推移しております。

3月15～16日が放出のピークだった

3月15日に放射線量が異常に高くなったのは何が原因だったのか？

東電が発表した放出量は、チェルノブイリ原発事故時の520万テラベクレルの6分の1に相当する莫大な量であった。

主な放出源は、1号機が13万テラベクレル、2号機が最大の約36万テラベクレル、3号機が32万テラベクレルだった。

2号機の放出量が最も多かったのは国が原発から半径20～30kmの住民に屋内待避を指示した3月15日と16日であった。

この時、水素爆発は起きていないが、この2日間だけで約34万テラベクレル放出されていたのだ。

(資料2)はNHK制作の番組ETV特集「埋もれた初期被曝を追え」の一部である。

濃密な放射能雲は15日未明から北の風に乗って南下し、福島県の沿岸部から茨城県、千

放射能雲は時計回りに県中央部に流れた

葉原へと流れたとシミュレーションされている。そこに雨が降り注いだ。

(資料3)は、国立環境研究所の試算を基に作成された「東北へのセシウム137拡散イメージ」である。

それによると3月15日、未明からの北風に乗って原発から150km近くまで流れた放射能雲は、正午頃から南南東の風に変化したため時計回りに北上し、今度は県中央部に流れ込んだ。

同じ時刻、浪江町や飯館村方面に放射能雲は流れ、午後11時頃には原発の北側で雨が降った。東電は広域汚染の原因を「原発の北西方向に浮遊していた放射性物質が雨で地表に定着した」としている。

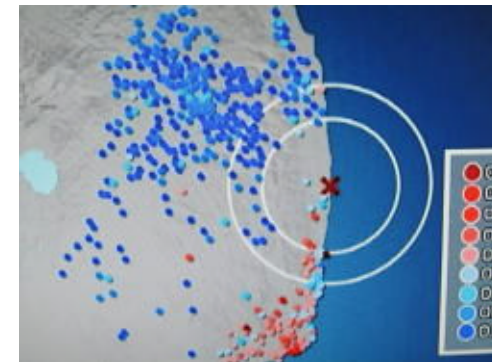
(資料4)を見ればセシウム134・137は原発から北西方向に、ヨウ素131は、いわき市方面に多く沈着している。

3月15日前後の行動記録は欠かせない

国はこの事実を知りながら隠し続け、大量被曝させたことを決して忘れてはならない。しかもヨウ素131は半減期が8日だからすでに消失している。

東電と国の完全犯罪を許さないためにも3月15日前後の行動記録は欠かせない。

(資料4) セシウムとヨウ素の分布図



〔NHK・ETV特集「埋もれた初期被曝を追え」〕

